

すると、私の質問が信じられないという、怪訝^{けげん}な顔をして、「勝つ見込みがない戦争を戦うのは、不道德ではないですか」と、訊^きき返された。

その時に、私は日本人の戦争観と、何と大きく違うのだろうか、驚いた。日本国民は現実よりも、精神を尊ぶのだ。

そして、教授と別れて、空港へ向かう途中で、もし、日本が先の大戦でアメリカに勝っていたとしたら、日本が今日のように、お詫^わびを特技とする、卑屈な、エセ平和主義国家となるはずがなかったと、思った。

きつと、そうなったのは、戦勢が絶望的になるまで戦って、敗れたのが、「不道德的」だったと、国民が感じているためなのだろうと、訝^{いぶ}った。

日本人は精神を尊ぶあまり、西洋人と戦争観が、まったくちがうのだろう。

日本独特な俳句は、短いゆえに、私たちの心に近い。西洋絵画が、すみずみまで濃密に描きこんでいるのに対して、日本画は背景が省略されている。

私たちは、すべてを見るよりも、心によって芯^{しん}をとらえようとするのだ。

第八章 アメリカと日本の原爆

不要だった原爆投下

八月六日に、広島に原爆が投下され、三日後に、長崎にも原爆が落とされた。

ルーズベルト大統領の前任者だった、フーバー大統領は『フーバー回顧録』のなかで、広島への原爆投下を、強く非難している。

「一九四五（昭和二十）年七月のポツダム会談の前から、日本政府は和平を求めている意向を、繰り返し示していた。

ポツダム会談はこのような、日本の動きを受けて、行われた」

「ヤルタ会談が一九四五年二月に催されたが、その一ヶ月後に、日本の重光葵^{まろ}外相が、東京駐在のスウェーデン公使と会って、本国政府に和平の仲介を求めるように、要請した。ここから進展はなかったが、日本が和平を求めている決意を、はっきりと示したものだ」

「七月二十六日に、ポツダム会談が日本に対して最後の通告を発するまで、日本は六ヶ月にわたって、和平について打診していた。

日本は原爆投下の二週間前に、ソ連に対して和平の明らかな意向をもっていることを、知らせていたが、トルーマンも、バーンズ、スティムソンも、日本の外交電文を傍受解読

して、承知していた」

バーンズは当時の國務長官、スティムソンは陸軍長官である。

「トルーマン大統領が人道に反して、日本に対して、原爆を投下するように命じたことは、アメリカの政治家の質を、疑わせるものである。

日本は繰り返し、和平を求める意向を、示していた。

これは、アメリカの歴史において、未曾有の残虐行為だった。アメリカ国民の良心を、永遠に責むものである」

広島と長崎に原爆を投下したのは、テニアン島基地から発進した、陸軍航空隊に属する、特別訓練を受けたB29だった。

日本が原子爆弾を持っていたら

私はスティムソン陸軍長官のもとで、陸軍次官をつとめ、トルーマン大統領が広島に原爆を投下することを決定したホワイトハウスの会議に出席した、ジョン・マクロイに会って、原爆投下について、質問したことがあった。

私がつとも敬愛した、アメリカの女性は他界してしまったが、ニューヨークに住んで

いた。

イフジーン・サルツバーカー夫人である。『ニューヨーク・タイムズ』社の持ち主であるサルツバーカー家の家長だった。小柄だったが、いつも矍鑠かくしやくとしていて、好奇心に溢れていた。小気味がよいほど、撥刺はくしとした人だった。

私がアメリカに来ることを知ると、タイムズ・スクエアに面している、『ニューヨーク・タイムズ』本社の役員食堂で、タイムズ紙の編集幹部を集めて、ゲストと質疑応答を行うことから、『エディトリアル・ランチョン』と呼ばれる昼食会を催してくれたり、ニューヨークの郊外のスタンフォードにある邸宅で、夫人の友人とともに、食事に招いてくれた。

ある時、ニューヨークを訪れたところ、マンハッタンを洗う、ハドソン川の上流の私邸で、私たち夫婦を招いて、晩餐会を催してくれた。

その席に、タイムズ紙の大記者と呼ばれたジェームズ・レストン記者の他に、夫人の古い友人で、前大戦の最後の年に、陸軍次官をつとめた、マクロイが招かれていた。

私はマクロイ元次官が、原爆投下を決定した会議に参画したことを、知っていた。

私は広島、長崎に対する原爆投下を話題にして、「もし、あの時、日本が原子爆弾を一

発でも持つていて、アメリカのどこかに落とすことができたとしたら、日本に核攻撃を加えたでしょうか」と、質問した。

すると、レストンが驚いて、「なぜ、そんな当たり前のことを、質問するのか。きかなくとも、答が分かっているだろう」と、口をはさんだ。

私は「これまで原爆投下の決定に参画した人に、会ったことがないので、確かめてみたかった」と、答えた。

すると、マクロイが「もちろん、あなたも答を知っているだろう。もし、日本があの時に原爆を一発でも持つていたとしたら、日本に対して使用することは、ありえなかった」と、いった。

広島と平和記念公園の慰霊碑に、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という碑文が刻まれているが、核兵器を持たないために、再び、悲惨な核攻撃を招くような過ちを、繰り返してはならない、という誓いの言葉として、読まなければならぬまいと思った。

原爆投下部隊の最後の戦友会

平成二（一九九〇）年八月に、ネバダ州とユタ州の州境を跨ぐウエンドオーバーまたにおいて、広島、長崎に原子爆弾を投下した、陸軍航空隊第五〇九混成団の最後の戦友会リュニオンが行われた。

ウエンドオーバーは半分がネバダ州、半分がユタ州で、四方を広大な砂漠によって、囲まれている。第二次大戦の末期には、小さな町だった。もともとも近い町でも、二百キロあまり離れていた。

そのために、昭和十九（一九四四）年に、ここに秘密航空基地が設けられて、原爆投下実施部隊が編成され、極秘裏に訓練を受けた。

当時の航空隊員が家族を連れて、アメリカ全国から五百人あまり、ウエンドオーバーのホテルに集まった。

私は広島、長崎に原爆を投下した部隊の最後の戦友会で、記念講演を行うために、招かれた。

私は講演の前日に旧隊員に案内されて、会場のホテルから、そう遠くないところにあつた、かつての飛行場を歩きまわった。

原爆を投下した、ポール・ティベッツ大佐の乗機『エノラ・ゲイ』号が使った格納庫が、そのままの姿で、残っていた。

閑散とした飛行場は、いまでは民間用に使われていて、小型のセスナ機が数機とまっていた。

ここを知らないで訪れた人は、四十五年前に原爆投下部隊の秘密基地だったということを知り、説明する掲示板もないから、ただ、さびれた飛行場だとか、思わないことだろう。

飛行場と、古い格納庫に、旧隊員が妻子を連れて、四、五十人いた。ビールを片手にした隊員もいた。私は七、八人と握手をして、立ち話をした。日本製のカメラや、自動車のディーラーをしているという者もいた。

翌日、ホテルのホールで講演をした。四十分、話すことになっていた。

講演の前に、ティベッツ准将（退役）に紹介された。准将は背広を着て、最前列に座った。

私は日本が六月に入ってから、和平のためにスウェーデンと、ソ連政府に仲介を求めて、申し入れを行っており、ワシントンも日本が降伏について交渉しようとしていることを、知っていたから、原爆を投下しなくても、降伏したと述べて、原爆投下は無用だったとい

った。

私は日本の政府と、軍の和平へ向けた動きを説明して、ハーバート・フーバー大統領が前述の『回顧録』に、原爆投下について書いていることと、ほぼ同じことを話した。

もつとも、フーバー大統領の『回顧録』が出版されたのは、十二年後の二〇一一年のことである。フーバー研究所が出版したが、九百五十七ページにのぼる大著だ。

私はこの講演のために草稿を書いた時に、アメリカの第三十四代大統領となった、ドワイト・アイゼンハワー元帥が、ステイムソン陸軍長官から、広島に原子爆弾を投下することを決定したと知らされたのに対して、「日本の敗色が濃厚で、原爆の使用はまったく不必要だと信じていたし、もはや不可欠でなくなっていた兵器を使うことは、避けるべきだと考えた」と回想していることを、指摘しようかと思ったが、何もアメリカ人の言葉を借りなくても、原爆投下は巨悪な振舞いだったから、必要ないと考えた。

当時、アイゼンハワーはヨーロッパ戦線における、連合軍最高司令官だった。

私は広島、長崎に対する原爆投下は、国際法に反する、人道にもとる残虐行為だったが、戦争の狂気のなかで行われたことであつたから、いまでは日本国民は原爆投下を赦しており、アメリカを恨むことはまったくないと、結んだ。

私が講演を始めてから、十分ちよつともすると、百人、百五十人と、つぎつぎに家族とともに席を立つて、抗議するために、廊下へ出ていった。そして廊下に集まって、愛国歌を合唱しはじめた。

原爆投下が日本人を救ったと考えるアメリカ人

私が話を終えた時には、会場は空席ばかりになって、四十人あまりしか、残っていないかった。

そのなかに、ティベツ准将もいた。私が感動したのは、私が演壇から離れると、ティベツ准将は廊下に出ていってから、三十人あまりが列をつくって、私に握手を求めて「よい話だった」とか、「日本側の見方が、よく分かった」といって、感謝してくれた。そのあいだも、廊下から愛国歌を合唱する声が、流れてきた。

旧隊員たちは、広島と長崎に原爆を投下したことによって、日本が降伏して、日本本土への侵攻戦を戦うことがなかったために、数百万人の日米両国の人命を救ったと信じて、大きな誇りとして、生きてきたのだった。

私を講師として招いたのも、原爆を投下したことによって、日本が救われたという話を

するものと、思っていたからだった。

最後まで会場に残った旧隊員の一人が、「もし、ジェネラル・ティベッツが、廊下に出たとしたら、全員が従っただろう。そうしたら、あなたはたった一人で、会場に残ることになった」と、いった。

ティベッツ准将は小柄で、寡黙だったが、健康ではないようにみえた。

前日、旧隊員の一人が、「戦後、ティベッツ准将は、軍人として不遇だった。ヒロシマのことがあって、軍は大きな功績として、称えることができなかったから、少将まで昇進することができなかった。じつに、気の毒な人だ」と、打ち明けてくれた。

私は、部屋に戻った。その夜、ホテルで戦友会の晩餐会^{ディナー}が行われて、私も来賓の一人として、招かれていた。

ところが、その前に「隊員のなかに、何人か酔っ払って、私を『殴り殺す』といきまいてるのがいるから、悪いけれど、今晚は部屋から出ないで、ルームサービスをとってほしい」と、いわれた。

翌朝、地元紙に私の講演の要旨が、報じられていた。隊員たちは全員が、ウエンドオーバーの大通りに建立された、記念碑の除幕式典に出かけたが、私は参加しなかった。

私は暇になったので、町から十キロほど離れたところにある、ソルトフラッツを見に行った。

ソルトフラッツは固い塩が一面にひろがっていて、完全に平面なので、自動車の世界スピード記録の走行が行われることで、有名である。

見渡すかぎり、真白な塩がひろがって、砂漠の太陽の強烈な光のもとで、輝いていた。

この日も、ピットには数十台の色とりどりのレーシングカーが、集まっていた。

日本から、三台のニッサンのスポーツカーが、来ていた。

車のまわりでは、東京から一緒に来たという、日本人の若い男女が十数人、働いていた。このなかの一台が、つい先程、時速二百七十七マイル（四百四十六キロ）を記録した、といった。

私は数人の日本人の男女と、立ち話をした。私が「すぐその飛行場で、四十五年前に、広島、長崎に原爆を投下した部隊が訓練をしていた」というと、「そんなことがあったのですか」といって、驚いた。

対米戦争は遠い昔のことになったのだと、思った。

夕方、二人の旧隊員が、私を空港まで送ってくれた。その前に、日本の新聞特派員が何

人か戦友会の取材に来ていて、インタビューを受けた。なかの一人が、「日本人としていうべきことを、いつてくれた」といって、誉めてくれた。

日本人とドイツ人との扱いのちがい

日本が和平の意志を示していたのにもかかわらず、広島と長崎に原爆投下したのは、日本人を人種的に蔑視する、強い意識が働いたからだだった。

日本人に対する憎悪は、激しいものがあつた。

白人が以前から、アジア・アフリカ人に対していだいていた偏見から、発したものだつた。

原爆投下の八ヶ月前の一九四四年十二月に、アメリカで実施された世論調査では、十三%の回答者が、あらかじめ用意された解答のなかから、「日本人を全員殺害すべきか」という質問に対して、賛成すると答えている。このような設問が設けられていたこと自体、驚かされる。

世論調査は、ドイツについても行われたが、「ドイツ人を全員殺害すべきか」という設問は、なかった。

戦時中にアメリカでは、多数の戦意高揚ポスターがつくられたが、ほとんどのポスターが、日本兵を醜い人間としてならまだしも、猿として描いている。

手長猿、オランウータン、ゴリラが日本軍の制服をまとっている。あるいは、虫や、爬虫類として、登場する。

アメリカ兵は、日本人の耳や、頭蓋骨を土産として漁り、日本兵の骨からペーパーナイフをつくったが、ヨーロッパの戦場で、ドイツ兵に対しては、絶対に行わないことだった。太平洋戦線で、アメリカのほとんどの部隊が捕虜をとることがなく、投降してくる日本兵を、射殺したという、アメリカ、イギリス、オーストラリア側の証言は、いくらでもある。

多くの連合軍の将兵が、日本人を^{みなごろし}殲にしたいと、思っていた。

対日戦争を通じて、空母艦隊を率いて戦った、ウィリアム・ハルゼー大將は、白人優越主義者であつて、「日本民族を絶滅すべきだ」と、公言していた。ハルゼーは緒戦の昭和十七（一九四二）年四月に、B25爆撃機を使って、東京をはじめとする日本本土を奇襲した、ドーリットル空襲を指揮したことによつても、知られている。

前述のマサチューセッツ工科大学のダワー教授の著書には、日本兵捕虜をとらないこと

を、誇りにしていた部隊が多かったことが、克明に書かれている。太平洋戦域を転戦した陸軍第四十一師団の陣中新聞に、「第四十一師団は捕虜をとらず」と、臆面もなく、書かれていたという。

第一章で、『アメリカ太平洋戦争公史』のなかに、日本将兵の離島における戦死率が、九十%以上に達すると述べていることに、触れた。これは、確かめようがないが、アメリカ軍によつて虐殺された日本兵が、含まれているのではなからうか。

アメリカ軍の記録によれば、捕虜となった日本将兵の多くが、負傷者だった。だが、アメリカ軍は多くの負傷した日本兵を、殺戮していた。

戦争中には、日本でも「鬼畜米英」といつて、さかんに憎しみを煽^{あお}つたが、日本将兵が投降してくるアメリカ兵や、イギリス兵を、見境なく虐殺するようなことは、まったくなかった。

アメリカ兵を「鬼畜」と呼んだのは、当たっていたのではないか。日本人は有史以来、人種平等を旨としていた。

戦後、人種平等の世界が到来するまでは、有色人種に対する身の毛がよだつような蔑視が、世界を支配していたのだった。

『ポツダム宣言』は日本の無条件降伏ではない

七月二十六日に、トルーマン大統領、チャーチル首相、スターリン書記長の三人が、ベルリン郊外のポツダムにおいて会談して、『ポツダム宣言』を発した。蒋介石総統は招かれていなかったが、宣言に名を連ねた。

この時点で、ソ連は昭和十六（一九四一）年四月に結ばれた日ソ中立条約があったので宣言に署名しなかったが、八月八日に条約を破つて、日本に対して宣戦を布告したのと同じに、『ポツダム宣言』に加わった。

アメリカは、ルーズベルト大統領のもとで、日本とドイツに対して、無条件降伏を要求していた。

昭和十八（一九四三）年十一月に、ルーズベルト大統領、チャーチル首相、蒋介石総統がエジプトのカイロに集まって、『カイロ宣言』を発表した。

『カイロ宣言』は、「三大同盟国は、日本国の侵略を阻止し、かつ、これを罰するために、今次の戦争を遂行しつつあるものなり」といつて、「この戦争では、日本の無条件降伏をもたらずまで、最大、かつ長期の行動を続行すべし」と、うたわれていた。

ドイツは五月に、連合国に対して無条件降伏を行った。

ところが、『ポツダム宣言』は、日本に対して条件付降伏を求めるものとなった。

『ポツダム宣言』は、「日本国軍隊の無条件降伏」のみを要求して、日本国、あるいは天皇の無条件降伏を、要求していなかった。

ルーズベルト大統領が急死したのが、四月十二日だった。副大統領だったトルーマンが、そのあとに第三十三代大統領として、就任した。

いったい、どうして、短期間のうちにアメリカの対日戦略が大きく変わったのだろうか。トルーマン大統領が、七月二十四日に、太平洋にあったマッカーサー元帥、チェスター・ニミッツ元帥、ヘンリー・アーノルド大将の陸海空軍司令官に対して、『オレインピック作戦』と名づけられた九州侵攻作戦を、十一月に実行するように、極秘命令が下している。

この二十二日前の七月二日に、スティムソン陸軍長官が、大統領に「対日計画案」を提出した。この計画案は、日本本土侵攻作戦に当たって、五百万人の兵力を必要とするが、アメリカ軍の死傷者が、百万人を超えることになるかと予想して、したがって「これまでの日本政府の無条件降伏」を要求することを変更して、「日本軍の無条件降伏」のみ呼び

かけることを、提案していた。

アメリカを恐れさせた日本軍

平成十八（二〇〇六）年に、ワシントンにおいて戦争末期に承認された、日本本土侵攻作戦計画文書の機密指定が、すべて解除された。

日本本土侵攻作戦は、『オペレーション・ダウンフォール』と名づけられ、第一段階である九州侵攻作戦と、日本の心臓部である関東平野に対する侵攻作戦の二つから、成り立っていた。

「ダウンフォール」は、「破滅」を意味する。

文書には一ページごとに、「^{トップシークレット}厳秘」のスタンプが押されており、九州上陸作戦と、

この計画によれば、九州を侵攻する「^{オペレーション・オレインピック}オレインピック作戦」は十一月一日早朝に、陸兵、海兵隊の十四ヶ師団が、第五艦隊の六十六隻の空母を含む三千隻に分乗、掩護されて、宮崎市附近、有明湾、鹿児島市の海岸に殺到することとなっていた。

十一月四日に開聞岳^{かいもんだけ}附近に、上陸する。その前に、十月二十七日に九州周辺の小島群を

占領して、水上機、レーダー基地などを設置する。

宮崎周辺の海岸の上陸予定地点は、アメリカ将兵の士気を鼓舞するために、それぞれビュイック、キャデラック、シボレー、クライスラー、フォードと、アメリカ国民が誇りとする乗用車の名をとって、名づけられた。

侵攻軍には、イギリス東洋艦隊が何隻か参加したから、イギリスに対するジェスチュアとして、イギリス製乗用車のオースチンが加えられた。

解禁された文書によれば、九州侵攻作戦だけでも、二十五万人にのぼるアメリカ軍戦死者がでると、推定された。

関東平野への侵攻は、「コロネツト作戦」^{オペレーション・コロネツト}の暗号名が与えられ、一九四六（昭和二十一年）三月一日に、相模湾に二十八ヶ師団が上陸することになっていた。九州侵攻作戦の二倍の兵力だった。

関東平野への上陸作戦には、第五艦隊をはじめ四千隻以上の艦艇が、投入されることになった。

日本軍民による頑強な抵抗が予想されたので、アメリカ軍戦死者が膨大な数にのぼることが、予想された。

マッカーサー元帥の情報担当部長だった、チャールズ・ウィロビー少将が、日本が一九四六（昭和二十一年）年の年末まで、まだ抗戦を続け、アメリカ軍戦死者が「少なくとも、百万人に達しよう」と見積もったことが、記載されている。

ワシントンが、日本本土を侵攻するのに当たって、もっとも恐れていたのが、アメリカの世論が耐えることができないほど、甚大な戦死傷者を強いられることだった。

機密文書は、「硫黄島まで太平洋の島々を、『蛙飛び作戦』^{リール・フロップ}によって奪ってきたが、どの場合にも、日本の守備隊に対して、二・五倍以上の兵力を上陸させた。

ところが、日本本土を強襲することになると、この比率がアメリカ侵攻軍に対して、迎え撃つ日本軍が二倍以上、あるいは民間人を加えれば、それ以上になる。日本兵ほど、悪魔に憑依されたように狂信的に戦う、民族はない」と、述べている。

アメリカが持てる力をすべて投入しても、日本を屈服させるのには、一九四七（昭和二十二年）までかかると、みられた。

この機密文書によれば、日本は海に空に陸に、軍民が特攻攻撃を休みなく行い、アメリカ軍に出血を強いることになる。

アメリカが占領下で行った調査では、日本は敗戦の日に、陸軍機と、海軍機を合わせて、

一万二千七百二十五機の爆撃機、戦闘機、偵察機などを、堅固な掩体えんたいのなかに温存おんぞんしていた。

特攻隊は無駄死ではなかった

日本に無条件降伏を要求し続けたら、原子爆弾を投下しても、日本国民が抗戦をやめな
いと、思われた。

そこで、アメリカ政府は國務次官となっていた、グルー前駐日大使の献策けんさくもあって、日
本に和平を強いるために、天皇制を存続することを餌えさにして、「条件付き降伏」コンディショナル・サレンダーを
申し出ることにした。

そこで、『ポツダム宣言』は、日本軍の無条件降伏のみを要求し、日本政府に対しては、
降伏条件を羅列していた。

『ポツダム宣言』は「吾等われらの条件は次の如し」と述べており、日本に対して有条件降伏を
求めたものだった。

昭和天皇が八月九日から十四日にかけて、御聖断という「異常な」決意をされることに
よって、三年八ヶ月にわたった戦争を、終わらせた。

もし、アメリカが無条件降伏を要求し続けたとしたら、八月九日から十四日にかけて御
聖断が下されることは、なかっただろう。

そうなれば、日本は最後まで戦うことになったから、天皇制ものこらなかったのではな
いか。

天皇がいなければ、日本でなくなってしまう。

今日では、特攻隊は「無駄死に」したという声が、国民の多くの者からきかれるが、特
攻隊こそが日本を救ったのだった。しかし、特攻隊だけに、勲いさおを限るべきではない。

私は、北から南までの島々において、玉碎した将兵にも、特攻隊と同じように深い感謝
の念を捧げねばなるまいと、思う。

それにしても、日本の兵たちはよく戦った。これほど精強な軍隊は、世界に他に例がな
かった。

軍歌が愛唱される日本

日本国民は、よく軍歌を歌う。世界でこれほど軍歌が国民生活のなかで、ひろく歌われ
ている国は、他にない。他のどの国でも、軍歌は軍隊経験がある人たちだけに、限られて

いるものだ。

日本では、若い人々までが、軍歌を歌う。「朝日新聞」をとつても、軍歌のCD集の全ページ広告が、載っているものだ。

なぜ、日本だけで軍歌が、これほどまで愛唱されるのだろうか。アメリカでも、ヨーロッパでも、アジアでも、まったく見られないことだ。

そのうえ、日本の軍歌はみな、そろって歌詞が暗く、節も哀調をおびている。

『ダンチヨネ節』は「弾は飛びくる マストは折れる……俺が死んだら三途さんずの川で鬼を集めてネ相撲とる」というものだし、『父よあなたは強かった』は、「敵の屍かたなとともに寝て 泥水すすり草を噛み……背もとどかぬクリークに 三日も浸つかっていたとやら 十日も食わずにいたとやら」といい、『露営の歌』は、「夢に出て来た父上ちちうへに 死んで還かえれと励まされ」というものだ。

陰惨だとは、いえない。もし、他の国で、将兵にこんな軍歌を歌わせたとしたら、士気がそがれて、われ先に逃げてしまうことだろう。

日本のこれらのほとんどの軍歌は、陸軍省か、海軍省が外部の作詞家と作曲家に依頼して、認可したものだ。それでも、日本の将兵はこのような軍歌を歌いながら、勇敢によく

戦った。

この事実は、日本が西洋諸国の不当な圧迫を蒙って、いかに国民をあげて、歯を食いしばって必死になって、戦ったのか、証している。

戦前戦中、兵士も、国民も、このような歌を上から強制されて、歌ったのではなかった。日本国民は、今日でも、幕末からこの国を護るために、戦ってきた精神を、忘れられないでいるのだ。これは、悲しい歴史だ。

世界のなかで、軍歌集が広く売られているのは、日本だけである。外国では、大きな部数をもっている新聞に、軍歌集の広告を、見ることがない。

アメリカが占領下で、軍歌や、愛国歌を禁じて以来、日本では今日に至るまでテレビや、ラジオ局が軍歌を放送することが、まったくないのに、国民のあいだで、若者まで含めて、軍歌が愛唱されている。

私たちは心の奥深い底で、明治以後、屈することなく、雄々しく戦ったことを、誇りにしているのだ。

九月二日に、東京湾に浮ぶアメリカ戦艦『ミズーリ』号の艦上で、降伏調印式典が行われた。降伏文書は、戦勝国と敗戦国のあいだで結ばれた、国際条約に相当するものだった。